

死相の女

野村胡堂

「親分、お早う」

ガラッ八の八五郎は、顎あごをしやくつてニヤリとしました。

「何がお早うだい、先刻上野の午刻ここのつが鳴ったぜ。冗談じやない」
錢形の平次は相変らず、狭い庭に降りて、貧弱な植木の世話に没頭ぱつとうしておりました。

「親分の前だが、今日は嬉しくてたまらねえことがあるんだ」

「それで朝寝あさねをしたというのかい、呆あきれた野郎だ。昨夜ゆうべどこかで化かされて来やがつたろう」

「へッ、そんな氣障きざなんじやありませんよ、憚はばかりながら太閣様たいこうさまと同じ人相なんだ、金が溜たまって運が開けて、縁談は望み放題と來やがる」

八五郎は拳固げんこで鼻を撫なであげます。

「大きく出やがつたな、八」

「ね、親分、八卦けや人相見なんて、本当に当るんでしょうか」

「そりや当るとも、八五郎が太閣様に似ているなんざ、凡人の知恵で言い当てられることじやねえ」

「——ですかね」

「縁談が望み放題、なんと来た日にや、たまらないね、八」

「なアに、それ程でもねえ」

八五郎はまだ顎を撫なでて居ります。

「誰がいったいそんな罪なことを言つたんだ」

「両国の玄々斎ですよ」

「何だ、あの山師野郎か」

両国の広小路に、葭簾か何か張つて、弟子の一人も使つている人相見、その頃、江戸中の評判男で、一部からは予言者ほど尊敬され、一部からは大山師のように言われていた玄々斎でした。

「山師でも何でも、当りやいいでしよう、親分」

「そうとも、手前の顔が太閤様そつくりなんてえのは気に入つたよ。太閤様がお猿そつくりの顔をしていたって話は知つてるだろうな」

平次は縁側に腰をおろして煙草にしました。

「猿？」

「猿公だよ、ハツハツ、飛んだ洒落しゃれつ氣のある人相見じやないか」

「畜生けつじやうッ、どうするか見やがれ」

ガラツ八は大きく舌鼓したづみを打ちました。

「怒るなよ、そんな事で腹を立てると、笑い者にされるよ」

「でも、太閤様の口はおまけにしても、金が溜たまつて、運が開けて、嫁よめは望み放題はいいでしよう。玄々斎の八卦けや人相は、怖いほど当るつて評判じやありませんか」

「本当にそんなに当るのかい」

平次は少し酔っぱい顔をしました。

「近頃大変な評判じやありませんか。運勢、縁談、失せ物なんか、よく当るそうですよ」

「縁談望み放題なんか、当つてもらいたいね、八」

「それほどでもないが——」

「いい加減にしろ、馬鹿馬鹿しい」

二人の話には埒^{らち}もありません。初夏の陽は縁側から落ちて、何処からともなく苗屋^{なえや}の呼び声が聞えます。

「玄々斎といえ巴、あんなに玄々斎へ夢中になつていた鳴子屋の女主人のお金が死んだそうですね」

「あんな達者な婆さんがね」

「死んで見たら、あんなに骨を折つて溜めた金を、皆んな婆婆^{しゃば}へ遣^{のこ}して来た事に気が付いたつてね」

と八五郎。

「そこへ行くとこちとらは死んだとき未練^{みれん}がなくていい」

「その代り、生きている時は張合がない」

平次と八五郎の話はいつでもこういつた調子です。花が散つてからはすっかり御用も暇^{ひま}で、無駄を言い言い、植木の世話でもするより外に所在もない二人だったのです。

「そう言えば、先刻^{さつき}鳴子屋の下男の七平に、親分の家の前で二度逢いましたよ」

八五郎は妙なことを言い出しました。

「変だね、お金婆^{かま}さんが死んだのは何時^{いつ}だえ？」

「昨日の朝、死んでいるのを見付けたそうで」

「そいつは何か曰くがありそうだ、気の毒だが、八

「へエ——」

「ちよいと路地の外を見て来てくれ。七平がまだその辺にウロウロしているなら、嫌応^{いやおう}言わせずにつれて来るんだ」

「へエ——」

獲物の匂いを嗅いだ獵犬のように、八五郎は外へ飛出しました。こうして瓢箪^{ひょうたん}から駒が出るほどの大きな騒ぎになつたのです。

「此方へ来るがいい、何を遠慮するんだ」

八五郎は鳴子屋の下男七平を引立てるよう路地に入つて來ました。

「親分さん、勘弁して下さい。悪氣でウロウロしていたわけじゃございません」

ともすれば逃腰になる七平は、江戸に住み付いた遠国者らしい、五十前後の線の太い親爺でした。

「八、そんな手荒なことをしちゃならねえ。爺さん、お前何か、この私に用事があるんだろう」

「へエ——」

言い当てられた様子で、七平はヘタヘタと上り框^{かまち}に腰をおろしました。

「言つて見るがいい、悪いようにはしないから」

「どうも腑^ふに落ちねえことがございますよ、親分さん」

七平はようやく重い口を切りました。

「何だい、その腑に落ちないというのは?」

「——」

七平は考え深そうに口を緘^{くく}みました。言つていいのか悪いのか、まだ迷つている様子です。

「路地の外でお百度を踏んだつて、御利益^{りやく}のあるわけはねえ。その腑に落ちないというのを、打ちまして見るがいい、十手や捕縄^{ぶぶ}を忘れて、この平次が相談相手になつてやろうじゃないか」

片膝を立てた平次、七平の頑固な様子をほぐすように、こう言うのです。

「有難うございます。親分さん、実は――」

「？」

「主人の死にようが、唯事じやないような気がしてなりません」

「それはどう言うわけだい」

「あの騒ぎのあつた昨日の朝、私が起出して見ると、お勝手の戸が開いておりました」

「それっ切りか」

「そんな事は滅多に無いことでございます。戸締りは主人が御自分で見廻りますから――」

「それから」

「主人が亡くなつたと聞いて、私も一と目お別れをするつもりで奥へ参りますと、番頭さんに途中で止められてしましました」

「？」

「二十年も奉公した私に、主人の死顔を見せられない筈はございません。あんまり変だから、そつと隙見をすると――」

七平はゴクリと固唾かたずを呞みます。

「なにか変つたことがあつたのか」

「若旦那の金三郎さんと、番頭の用助ようすけさんと、主人の甥おいの久太郎さんが、何かヒソヒソ相談をしておりましたが、――チラと見た主人の死顔が、どうも容易よういじやないようになります。それに、小耳に挾はさんだ言葉の中に、紐ひもの跡あとが頸筋くびすじに残つて居るというようなこともありました」

「フム」

「若ししあれが変死かへりだつたら、死んだ主人がお氣の毒でござります。御存じの通り、評判の悪い主人でございましたが、二十年奉公した私は、黙つてあのまま葬ほうむられるのを見てはおられません」下男七平の話はなかなかに含蓄がんちくがありそうです。

「お葬いは?」

「今日の未刻やつということになつて居りますが」

「医者には診せなかつたんだね」

「へエ——、医者の入つたことのない家でございます」

七平は淋しく笑いました。爪に火を灯すともような、江戸一番の吝しゃわん坊の鳴子屋なるこやは、いかにもそれ位のことがありそうです。死骸は寺で引受けさえすれば、そのまま葬ほうむられた時代は、これでも通らないことはなかつたのでした。

「八、いま何刻だろう?」

「午刻半ここひつはんでしようね」

八五郎は天文を按あんする恰好で答えます。

「大急ぎで中橋の鳴子屋へ行つてくれ。氣の毒だが検屍けんしが済まないうちは、葬いを出さしちやならねえ」

「心得た」

八五郎のガラツ八は、彈み切つて飛んで行きました。その後姿を見送つて、

「鳴子屋の中のことを、一と通り聞かしてくれ」

平次は七平に訊ねます。

「主人のお釜さんは四十三で、旦那が五年前に亡くなりましたが、お店を切り廻して、身上じんじょうは太るばかりでございました。支配人の用助さんは私より三つ年下の五十四で、養子の金三郎さんは二十

五、ゆくゆくは主人の姪めいのお紋さんと嫁合めあわせることになつて居りますが——」

「外には

「小僧が二人、下女が一人、これはお早といつて、房州ぼうしゅうもの者ものでございます」

「商売の方は?」

「大した繁昌でございます」

「それにしちや人数が少ないようだが」

「番頭さん之外に、若旦那の金三郎さんと、甥おいの久太郎さんが店をやり、御出入りの大名旗本方へも参ります」

名代の握り屋だけに、人の数までも最少限度に切詰めているのでしよう。

「その久太郎というのは?」

「お紋さんと従兄妹いとこ同士で、三十そこそこでございます、肌合はだいの面白い方で」

「そんな事でよかろう、行つて見るとしようか」

「私がここへ来たことは、どうぞ内証ないしょにして置いて下さい」

「それは心得ているよ」

錢形平次は斯こうして、この厄介な事件に乗出しました。

三

平次が中橋なかばしの鳴子屋へ行つた時、仕度までした葬とむらいが、門口で

ガラツ八に止められて、大揉おおもめの真つ最中でした。

「親分、これはどうしたことでございます」

青くなつて顛ふるえ上つている家族や奉公人の中から、平次の顔を見ると、いきなり飛出して来たのは三十前後の恰幅の立派な男。鬚の跡も青々とした、ただの呉服屋の番頭というよりは、町奴まちやっこ、浪人者といった方が相応ふさわしい男振りです。

「お前さんは？」

「亡なくなった主人の甥おいの久太郎でございます」

「それなら話はよく解るだろう。検屍が済まないうちは、その葬いは出しちやならねえ」

「どう言うわけで、親分おひこ」

「ともかく、もういちど奥へ引込めて貰おうか」

「——」

門口へ出た葬とむらいを、もういちど奥へ引返させるのは、あまり縁起の良いことではありませんが、久太郎もその上争う気力がなかつたものか、素直に元の部屋に引返して、次の指図を待ちました。

それから半刻はんとき、氣まずい時立ちが遅々として過ぎて行きます。平次が下つ引を走らせて呼んだ係かかり同心が二三人の手先と駆け付けてのは申刻ななつ少し過ぎ。

棺を開いて死骸に何の異状もなければ、女世帯の町人とは言つても、幾つかの大名屋敷の御用まで勤めた鳴子屋の暖簾のれんに傷をつけて、錢形平次は引込みが付かなくなります。

息を呑んだ家族奉公人の顔を一とわたり眺めて、平次も何やら自信のグラ付くのを感じないわけには行きません。馴れた平次の眼に映つたところでは、この中に主人を手に掛けるような、大それた悪人が一人も交つて居そうには見えなかつたのです。

棺の蓋は開かれました。中は型の如く経帷子に、薄化粧をさせた女主人お釜の死骸。

「おッ」

平次も係り同心も驚きました。襟のあたりは巧みに茶袋で隠してあります。それを取除くと、たつた一と眼で判る紐の跡が、凄まじい黒血を滲ませて頸の下へ大きな溝になつてゐるではありませんか。

「これでも検屍を願つたのが不服だというのか」

平次もさすがに、久太郎を顧みて声を励ました。

「へエ——」

「変死人を隠して葬式^{とむらい}を出して済むと思うか、——誰がいつたいこの始末を隠すことを考えたんだ」

「私でございます、親分さん」

言下に番頭の用助が応えました。月代^{こた}の光沢^{さかやき}によくなつた、少し鈍重らしい五十男です。

「いえ、世間様を騒がせたくないと思って、皆んなで相談してやつたことでございます。番頭のせいじやありません」

若い養子の金三郎は、たまり兼ねた様子で遮りました。
念のため間取りを見ると、主人お釜の部屋は一番奥の六畳で、雨戸を開けて庭へ出ない限り、通路はたつた一つ、襖を開けて掛け暖簾^{のれん}をくぐって、廊下を店口へ出る外はありません。

廊下の左右には、薄暗い部屋が二つ三つ、其処に姪^{めい}のお紋と番頭の用助とが寝^{やす}み、お勝手の傍の二畳には下女のお早と下男の七平、養子の金三郎と甥の久太郎は、二人の小僧と一緒に、二階の三間に分れて寝んでいるのです。



平次は自分で二階へ登つて見ましたが、普請が古いので、段々
がきしんで変な音を出します。昼ではあまり気が付かずには済まないでしょう。
夜分目ざとい人なら、気が付かずには済まないでしょう。

「よく鳴る階子ですね、親分」

八五郎は下から声をかけました。

「手洗に起きたと思うだろうよ」

「なるほどね」

平次の言葉の含蓄がんちくを味わうようにガラツ八は首を傾げました。

「主人を怨んでいる者は?」

平次は番頭の用助に定石通りのこと訊きました。

「へエ——」

用助は淋しい苦笑いを浮べて、久太郎を顧みます。

「私の叔母ですが、敵の多い人でございましたよ」

久太郎は引取つて答えました。

「家の者の中では？」

と平次。

「まさか殺すほどの悪人も居りません」

「すると、怨んでいる者はあつたわけだね」

「——」

久太郎もさすがに口をつぐみました。併しこれは久太郎の口を開かせる迄もありません。小僧や下女や、近所の衆や親類の者の口裏から、平次と八五郎は、やがて重大なことを聞込んでしまつたのです。一と口に言えば、鳴子屋の家の者で、主人のお釜を怨んでいない者は、たつた一人もいなかつたということでした。

奉公人たちは、選りに選つて親許や家のない者ばかりで、その上給料を一年も二年も溜められ、それを棒に振る決心でなければ、鳴子屋から出るわけに行かず、番頭の用助などは年に五両の給料を、五年越溜められた上、白雲頭しらくもあたまから奉公して、百両に纏めた金を先代に預けたまま、今以つて返して貰えないという、ひどい目に逢つてゐるのでした。

養子の金三郎とお紋は、三年も前から一緒にして貰う約束でしたが、今年はお紋の前厄まえやくだから、今年は本厄だからと延々となつております。いよいよ来年こそはといつて居ても、その時になるとまた、今年は後厄だから——と、期限もなく祝言を延ばされることでしよう。

そして金三郎は給金のない番頭として、お紋は髪錢湯錢かみせんゆせんもままでならない下女として、これから先幾年働かなければならなかつたでしよう。

「七平は？」

平次は念のために訊いて見ました。そんな空氣の中から、主人の変死を密告した、七平の気持が知りたかったのです。

「あれは別ですよ、叔母の隠密おんみつだから」

久太郎は囁んで吐き出すように言い切ります。

四

檢屍けんしの役人が帰った後、平次と八五郎は、根気よく調べ上げました。

「お勝手の戸締りは、朝誰が開けることになつて居るんだ」

「七平どんか私ですよ」

下女のお早が、嫁ゆき遅れらしい顔を出しました。

「昨日の朝お勝手が開いていたそうじやないか」

少し遠くの方に、素知らぬ顔をしている七平を意識しながら、平次は訊ねました。

「そんな事はありません、私が開けたんですから」

「お早は事もなげです。」

「そいつは話が違つて来るようだな」

「お早どん、お前が開けたのは、何時だい」

七平も少し面喰めんくらいました。

「卯刻むつ少し前ですよ」

「それから何うした？」

と平次。

「少し早いから、もういちど自分の部屋に帰つて着換きかんえやなんか

しました」

「多分、もういちど床の中へもぐり込んだのでしょうか。

「七平がお勝手の開いてるのを見たのは?」

「ちょうど卯刻むつでした」

「そのあいだ誰もお勝手を通りはしまいな」

「通ったものがあれば、私かお早どんかが気が付く筈はずです」
下男部屋と女中部屋が、奥からお勝手への通路を挟はさんで関所になっていたのです。

「親分、ちよいとお顔を」

「何だい、八」

ガラツ八が招き猫のような手付をして居るのを見ると、平次はお勝手から水下駄を突っかけて、裏口の方へ出ました。

「この潜戸くぐりも開いちやいなかつたそうですよ、親分」

八五郎は厳重な締りをした潜戸を指しました。

「多分そんなことだろう」

「あっしには見当が付かなくなりましたよ、少し筋道だけでも立てて下さい」

「どんな筋道だい」

「七平が言うとおり、お勝手が開いていれば、下手人げしゅにんは外から入って、外へ逃げた筈はずやありませんか、ところが下女は自分で開けたというし、この通り、お勝手から外の往来へ出る裏口も、きのうの朝は開いていなかつた——小僧二人の口が合うところを見ると、これも満更嘘うそじやないでしよう」

「で?」

死相の女
「下手人はやはり家の中の者でしそうね、親分」

「それがまるつきり解らないよ」

「へエ——」

「俺はお前と違ったことを考えていたんだ、——下手人が家の者なら、うたが疑いを外へ持つて行くように、何処か一力所は開けて置くに違いない——とな。だから、お勝手が開いていたと聞いた時は、てつきり家の者の仕業だと思った」

「なアーる」

ガラツ八、正に一言もありません。

「ところが、お勝手を開けたのが下女だというから、話が違つて来る。その上裏の潜戸迄閉つていちゃ念入りだ、——曲者家にあり——と書いて置くようなものだ、どうも外の者らしい匂いがある」

「へエ——」

「もう少し念入りに見よう」

平次はもう一度家の中に取つて返しました。きのうの朝家中の雨戸を開けた者を調べて見ると、店から居間の雨戸を開けたのは小僧の一人で、これは何の仔細しがいもなかつたと言います。

奥を開けたのは、おんなあるじ女主人の死んでいるのを見付けた姪めいのお紋。

「そう言えば、雨戸に心張がありませんでした」

「雨戸に締りしまがなかつたのかい」

「いえ、叔母は用心深い人で、雨戸は二重に締めるんです。棊さんを

卸おろして、その上心張棒をして」

「その心張はなかつたのか」

「棊だけおりて、心張は戸袋の隅に立ててありました」
こう言うお紋は、決して美しくはありませんが、愛嬌のある、
健康そうな娘でした。

「その晩に限って忘れたんじゃあるまいな」

「そんな筈はございません。この七日の間は、まるで気違いのように戸締りばかり気にして居たんですけど」

「七日の間——そいつは、どんな事なんだ」

「——」

お紋は言つてはならぬ事を言つたように、黙りこくつてしましました。

「言つてくれ、そいつはわけがありそうじゃないか。叔母さんが、何を怖こわがっていたんだ、——誰が叔母さんを脅おどかしていたんだ」

「——」

「お前が言わなきやア、他から聞く手もある。が、叔母の敵を討つのは、差向むかきお前だ。こいつは、隠して置いちや済むまいぜ」「申します、親分さん」

お紋は思い切った顔を挙げました。見てくれはそんなによくありませんが、こう話していくと、いろいろ感情の動きを見ていると、この娘には、言うに言われぬ素直なよさがあります。

「それはいい心掛だ、——叔母さんが何を怖がっていたんだ」

「玄々斎げんげんさいの言つた事だそうです」

「玄々斎が何を言つたんだ？」

両国人相見が、いよいよ此処に登場したのです。

「七日経たないうちに、死ぬ——と言つたんだそうです」

「叔母さんがかい」

「え、——叔母は玄々斎の言うことなら、どんな事でも本当にしました。それからは外へ一と足も出ず、戸締りを一々自分で見廻って、本当に息を殺して奥の部屋に居たんです」

「それは何時のことだ」

「死んだのは、ちょうど言われてから七日目の晩に当ります」

「みんなそれを知っているのか」

「私と金三郎さんと、久太郎さんと、番頭さんが知っているだけです。久太郎さんは大層心配して、死ぬと決った命も、慈悲善根を施^{ほど}こして助かつた例^{ため}しがあるから、いろいろすすめたようですが」

「叔母さんは慈悲善根を施^{ほど}こす気がなかつたと言うのだろう」

「——」

お紋の話で、事件に新しい段階が現れました。これを辿^{たど}つて行ったら、何処まで行くことでしょう。

「親分、変なことになつたね」

横合からガラッ八が首を出しました。

「八、家中の出口を捜してくれ」

「へエ——？」

「入つたところは要らない、出口だけ捜すんだ。^{てんまど}天窓、縁の下、
掃除口^{そうじぐち}、引窓、そんなところだ」

「入口^{はい}は出口^じやありませんか、親分。人間が出られるところなら、入^{はい}られる筈で」

「理窟を言うな、——外からは入られなくたって、内からなら出られる場所があるだろう。捜して見な」

「へエ——」

八五郎は飛んで行きました。

五

「親分、そんな出口はありませんよ」

ガラツ八はぼんやり帰つて来ました。

「そんな筈はないが——」

「天窓も掃除口も、人間が潜れないほど小さいし、お勝手の引窓は恐ろしく高くて、梯子はしごでもなきや潜つて出られませんよ。それに、きのうの朝見た時は、窓を締めたまま紐ひもが荒神柱こうじんばしらに結んであつたそうですよ」

「フーム」

「曲者は家の者でないとすると、何処から入つたんでしょう、親分」

「宵から入つっていたのさ、——どこかに隠れていて、夜中に主人を殺し、曉方前に脱出したのだよ」

「家の者とぐるになつていて、曲者の出た跡を、そつと締めたんじやありませんか」

「それも考え方の事ではないが、そんな事までして、家の者に疑いをかけるのは、危ないことじやないか。外から曲者が入つたのなら、手引があつたにしても、此処から逃げましたと開けて置くのが本當だ」

「じゃ、下手人はやはりこの家の者でしょう」

「いや、違う、——これを見るがいい」

平次はガラツ八といつしょに庭に降りました。先刻見さつきた裏口と

は反対の方、奥の主人の部屋の前の板塀の上に、忍返しが少し損じて、古釘に新しい巾きれが少し引っかかつて居たのです。

「これは？ 親分」

「曲者の残して行つた手形だよ。花色木綿はないいろもめんの裏地だ、——が一度も雨に当つていないところを見ると、一昨夜おとといの曲者がここから逃げたものと決めてよからう、——どうして家を脱出したか、それが解りさえすれば」

平次は腕を組みます。

「親分、両国へ行つて見ましようか」

「ウム、玄々斎を当つて見よう。死相うらなを占うのは法度はつとだ、構わないからうんと脅おどかして見るがいい」

「親分は？」

「俺は一と足後から行く」

「それじゃ」

ガラツ八は残る陽足ひあしを惜しむように両国へ飛びます。

その後で平次は、金三郎と久太郎と用助と、一人一人に逢つて見ました。

「この店の後はお前が取るんだね」

「へエ——」

気の弱そうな金三郎は、たつたこれだけの問い合わせにもう真青になります。万両分限ぶげんの鳴子屋の身代のためには、虐しいたげ尽されている養子の金三郎は何をするかも解らないと思われるかも知れないのです。

「番頭はどうなるんだ」

「そのまま店にいて、支配をして貰います」

「大分金や給料を預かってあるということだが」

「今朝みんな返してしまいました」

「大層気の早いことだな、番頭の方から欲しいとでも言つたのか」

「いえ、久太郎さんの指図で」

此處にもまた久太郎が意志を働くせて居ります。

「いくら返したんだ」

「預かつたのが百両、給料は二十両、それに利息を入れて、百三十両。私から心持だけの手当二十両を加えて、百五十両にしてやりました」

「久太郎は？」

「まだ何にも話をしませんが、いずれ暖簾のれんでも分けることになります」

「金があるのか」

「五百や三百は、私が出します」

金三郎の答えには何のこだわりもありません。

それから、用助ようすけと久太郎に逢いましたが、一々金三郎の言う通りで、何の変つたところもありません。この家中の者は、主人のお金が死んだためにいくらかずつ得をしていることだけは確かです。

平次はあきらめて両国へ、八五郎の後を追いました。広小路の葭簾よしぢ小屋を覗くと、中は空っぽ、薄暗くなると引揚げて、浜町の家へ帰ることを確かめて、玄々斎の隠れ家へ辿り着いたのは、もうすっかり暮れてからでした。

「何だと、死相があるから死ぬと言つた?——それじゃ、七日と日を限つたのはどう言うわけだ。その七日目にお金は死んだんだ

ぞ。手を下さなくたって手前てめえは下手人見たいなものだ
ガラツ八の声です。

「それはこの玄々斎の観相がよく当るからだ、何の不思議もない」
八五郎の囁み付くような声に応じて、落着き払った玄々斎の声。
少し高慢な、そのくせ媚びるような調子で聞えます。

「死相を觀るのは御法度ごはつとだぞ、野郎」

「そう言つても、ありありと現れたものは、教えてやるのが親切だ、——慈悲善根を施せば、死相は自然に消えてなくなるとも言つて上げたが——」

玄々斎はますます落着き払います。

「八、そいつを縛つてしまえッ」

平次はいきなりガラツと格子を開けました。

「御用だぞッ」

八五郎は親分の顔を見るとすっかり威勢がよくなつて、高々と銀磨きぎんみがの十手を振り上げます。

「あれえ」

悲鳴をあげたのは、白粉おしろいの濃い大年増。これは後で、玄々斎の女房のお弁べんと知れましたが、三十五六の小皺こじわを、厚化粧で塗りつぶし、真つ赤に口紅を塗つた——その当時にしては物凄い女です。

後ろに眼ばかり光らせて、ガタガタ颤えているのは、弟子の滝たきまつ松、二十七八の小柄な男で、往来で呼込みをやるのが稼業ですから、恐ろしく陽ひに焦けて居りますが、気の弱そうなところがあります。

「八、構わないから引つ括つて番所へしょつ引いて来い。お係りに願つて、夜つびて叩いて見る」

平次にしては、何という荒っぽい言い草でしょう。

「合点」

八五郎は平次の眼の色を読むと、総髪の玄々斎を膝の下に敷いて、キリキリと縛り上げました。容赦も情もない、深刻な深縛です。

「ああ痛ツ」

「騒ぐな野郎、人間一人絞め殺したんだ。手の一本や二本折れたって、何だ」

「と、飛んでもない、親分さん方。鳴子屋の女主人が、七日のうちに死ぬと言ったのはこの玄々斎ですが、手にかけた覚えなどはありません」

「黙れツ」

「いえ、黙っちゃ居られません、人殺しの下手人にされちゃ叶わない」

「それじや本当の事を言うか」

と平次。

「本当に嘘にも、死相のあるのを言つてあげたまでの事で」「野郎、まだ馬鹿にする気か、死相なんて大出鱈目だ。万々一死相が本当にしても人間の面が曆じやねえ、七日と日を限つて、そんな大胆なことが言えるものか。当らなかつたら手前どうするつもりだ」

「それが、その慈悲善根を施^{ほど}こせば——」

「馬鹿ツ、この野郎容易のことじや本当の事は言うまい。死相を占つただけでも、遠島か追放は免^{まぬが}つけ^{ばたけ}こはねえ。番所へつれて行つて、存分に引つ叩^{ばた}け」

「あッ、御勘弁、お許し下さい。申します、皆んな申上げます」
玄々斎は畳に額をすり付けました。四十前後の、顔も恰幅も立派な男ですが、亡者には睨みがきいても、錢形の平次を誤魔化しようはなかつたのです。

「よし、正直に言うなら、繩だけは勘弁してやる。次第によつては、御慈悲を願つてやらないものでもない。どんな目論見があつてそんな大それたことを言つたんだ」

「済みません。実は、鳴子屋の久太郎さんに頼まれました」

「何？」

あまりの予想外な言葉に、平次もガラツ八も驚きました。

「久太郎さんがやつて来て、——奉公人の給料を払わないばかりでなく、養子と姪の祝言の入費さえ出し渋る叔母に、何とか目を覚さ(さま)してやりたい、頼むから慈悲善根を施さなければ、七日経たないうちに死ぬと言つてくれ、叔母はこの世の中で、お前の言う事だけを本当にするから——とたつてのお頼みでした」

「それを引受けたのか」

「へエ——、人助けの為と思いまして」

「——」

人助けのために、何かするような人間ではありませんが、平次はともかくも、その言葉に堪能したものらしく、ガラツ八を促して、宵の街を中橋まで引返しました。

「親分、あつしには薩張り解らねえ」

「だんだん解つて来るじゃないか、あの部屋から、下手人がどうして出たかさえ解れば」

中橋の鳴子屋に引返した二人、久太郎を物蔭に呼んで、「叔母に死相があると、玄々斎に言わせたのは、お前だつたそうじやないか、何だつてそんな馬鹿な細工さいくをしたんだ」

平次は高飛車に出ました。

「恐れ入りました。玄々斎に頼んで、叔母を脅おどかしたのは、この私に相違ございません。そうでもしなければ、叔母は無慈悲非道が募つのつて、生きながら地獄に墮おち兼ねなかつたのでございます」「少し薬が効き過ぎたな」

「へエ——、今では後悔して居ります。が、玄々斎が、弟子を使つて、妙な細工をしていることを聞くと、一寸そんな事をやつて見る気になりました」

「妙な細工とは何だ、——そんな無理な頼みを、玄々斎が聴容れるのが不思議だと思つたが」

「こんなわけでございます。親分さん、あの玄々斎という奴は悪い人間で、巾着きんちやく切きり上がりの弟子の滝松というのを使って、近所でかつ払い、こそ泥かどわかし、誘拐うなを働くを働かせ、その盗つた物やさらつた子供を隠しておいて、人相や占いうらなの客が来ると、その場所を言い当てやるのだそうでございます。私はこのからくりを滝松の友達から聞きました。あんまりな悪戯わるだから、お上へ申上げようと思いましたが、フト気が変つて、それを種に玄々斎をうんと言わせ、少しでも叔母の心を柔げやわらようと思つたのでございます。出鱈目な人相観が当つて、叔母が七日目に殺されたのは、どうした廻り合せでしよう。こうなると、死んだ叔母に申訳がなくて、じつとし

て居られないような心持になります」

久太郎はすっかり打ちひしがれて、何も彼も白状してしまいました。

「ところで、その細工を知っているのは、誰と誰だい」

「私と玄々斎だけです。尤も、もつと、玄々斎のところで脅おどかされて來た晚、叔母は番頭と金三郎とお紋には話したようですが」

「玄々斎の家で誰か聞いてはいなかつたか」

「誰もいなかつた筈ですが、私が帰つてから女房や弟子に話したかも解りません」

「玄々斎の女房は恐ろしく若作りだが、あれはどんな女だい」

「玄々斎と叔母が懇意にしているのが気に入らなかつた様子です。叔母は四十を越していましたが、あの通り元氣もので、それに万両分限の女主人おんなあるじですから——」

平次も次第に事件の輪郭りんかくが解つて来るような心持がします。が、相変らず、下手人がここから脱出ぬけだした秘密だけは解りません。

「もういちどあの部屋を見せて貰いたいが」「へエ——、どうぞ」

久太郎に案内させて、平次と八五郎はお釜の殺された部屋に入つて見ました。

その時はもう雨戸も締め、棊さんも心張もおろしておりましたが、平次は心張を外させ、棊をあげて雨戸をあけました。

「八、ちょっと気が付いたことがある。よく見ていてくれ」

そう言いながら、庭下駄を突っかけて外に出た平次。半開きの雨戸に手をかけて、外からそつと閉めました。

「あッ」

ガラッ八が驚いたのも無理はありません。外から雨戸を閉め切ると、重い棊^{さん}は生き物のように動いて、独りでにそろりと穴の中へ落込み、雨戸は内から閉めたと同様に、厳重^{げんじゅう}に閉つたのでした。心張無しで、棊だけおりて居たわけはこれで判りました。

「八、忍び返しの釘で、裏を破つた^{あわせ}祿^{くじ}を捜し出せばいい、行こう」平次とガラッ八は、夜の更くるも厭わず、もういちど浜町の玄々斎の家へ引返したことは言うまでもありません。

七

それは併^{しか}し大変な見当違ちがいでした。

一昨夜は玄々斎の女房^{お弁}^{べん}の里から、妹たちが一人まで来て話しこみ、狭い家へ泊り込んで、お弁も玄々斎も一步も外へ出なかつたことは、はつきり判つてしまつたのです。

「滝松は」

「町内の人達と、三日前から江の島へ参りました。帰つたのは昨日の昼過ぎで——」

滝松——巾着^{きんちやく}切上^{きりあが}りという、あまり善人らしくはない男ですが、人などは殺せそうもない小さい男が、頭をボリボリと搔きます。

江の島へ行つたのは十七人、滝松もその一人で、鳴子屋の女主人の殺された晩は、若い者の発議で品川に泊り、その晩半分ほどは土地で遊んだことまで、あり余るほど証人があります。

一行十七人、悠々閑々と歩いて江戸に入つて、浜町へ辿り着いたのはその翌日^{あさひ}の昼過ぎ。

念のために、玄々斎の着物、滝松の着物を一枚一枚調べました

が、花色木綿はないろもめんの裏ひしの捲ましられた袷などは一枚も見当りません。

その間に、平次の発見したのは、玄々斎の女房のお弁が、すっかり厚化粧を洗い落して、急に五つ六つ老けていたことだけでした。

「親分おどろいたね」

「フレーム」

錢形平次も旗を巻いて引揚げるだけです。

それから三日。

「親分、中橋なかばしの庄太親分が、金三郎とお紋を縛ったそうですよ」

ガラツ八が新しい情報を持つてきました。

「そんな馬鹿なことがあるものか、あの二人はこの上もない善人だ。久太郎を縛るならまだ話の筋は通るが——」

「久太郎が下手人で？」

「いや、久太郎じゃない、——俺はつまらない事に気が付かずにいたんだ。今日は一つ品川まで行つて見よう」

「へエ——」

平次は急に仕度をすると、ガラツ八をつれて品川まで歩きました。日本橋から二里、平次と八五郎の達者な足で飛ぶと、たつた一刻で着いてしまいます。

宿外れの鶴屋はたごという旅籠屋のれんの暖簾をくぐると、平次はいきなり番頭を呼出して、五日前の晩の、浜町の江の島詣りの連中のことを訊たずねました。

「大層なお元気でございました。このまま江戸へ入っちゃつまらないからと、若い方々が無理にお泊りになつたようで、へエ、お人数は十七人で」

「みんな此処へ寝たわけじやあるまい」と平次。

「それはもう、若い方でございます。一度はみんな土蔵相模へお出でになりました、そのうちでもお年を召した方が、大引け過ぎに半分ほど手前どもへお帰りになりました」

「誰と誰が土蔵相模へ泊つたか解るまいな」

「さア、それは、十人ほどもお泊りでしたから、ちょっと解り兼ねますが——」

それ以上は番頭にも解りません。

「氣の毒だが、その晩出した貸し襦袢とてらを見てくれないか、——どうせ旅装束たびしようぞくで土蔵相模へ行つたわけじやあるまい」

「へエ、お安い御用で」

番頭は平次を案内して納戸につれ込むと、女中の手をかりて七八枚の丹前を出しました。

「これでございます、親分さん」

「どれどれ」

八五郎の手をかりて、二人でその十七八枚の襦袢とてらの裏——花色木綿を調べて行くと、

「あつた、親分」

とうとうガラツ八が発見しました。一枚の襦袢の裏が釘に引裂ひきさかれて、一寸五分ほど、捲り取られたまま白い綿を見せて居るではありませんか。

鳴子屋の堀の釘に残った巾きれを平次は懷から出しました。当てて見ると、大きさも、色合も、寸分の隙もなくピタリと合います。

「親分」

「あの野郎だ」

二人は番頭に礼を言つて、一気に浜町まで飛びました。玄々斎の家を覗くと空っぽ。

「両国だ」

「それツ」

真っ直ぐに両国へ――。

「御用ツ」

「滝松、神妙にせい」

葭簾の前後から飛込んだ平次とガラツ八。

「何をツ」

滝松は隠し持った匕首を抜いて、猛烈に抵抗しましたが、それも平次に叩き落されて、ガラツ八の手でキリキリと縛り上げられたのです。

盛り場の人垣の中、それを引いて行くガラツ八の得意そうな顔と別れて、平次は自分の家へ久し振りで晴々した心持で帰りました。

×

×

「何だって滝松が、あのお釜を殺す気になつたんでしょう」

その晩、ガラツ八は平次に絵解きをせがみます。

「いずれお白洲しらすでわかる事だろうが、あれをやらないと滝松の心持がすまなかつたのさ」

「へエ――」

「今でも、盗んだり誘拐したりして、玄々斎に言い当てさせている滝松だ。あの死相だけ一つ外れちや、自分のせいのような気がするんだろう。悪人には妙にそういった片意地なところがある

ものだ。それからもう一つ、あの師匠の女房のお弁という女に頼まれたんだろう」

「へエ——」

「玄々斎がすっかりお金に取入つて、お金が来たり玄々斎が行つたりするのが心配だつたのさ。お弁は亭主の人相観の信用を落さないようにしてくれとか何とか持ちかけて、始終鳴子屋へ使いに行つて奥へ自由に出入りの出来る滝松にあんな大それた事を頼んだんだろう。お弁の厚化粧が急に素顔になつたのはただ事じやないよ」

「悪い女だね」

「いづれお白洲へ呼出されて、何とかお処刑しおきになるだろう。しかし、旅籠屋の襦袢どてらを着たまま二里の道を中橋まで来て、夜明け前に品川へ引返した滝松は恐ろしい人間だよ」

「久太郎は？ 親分」

「叔母をからかつたのは少しやり過ぎだが、あの男に悪氣わるげはない、——番頭や金三郎お紋のことまで考えてやつたことだから、軽いおとがめで済むだろうよ」

「へエ——」

「鳴子屋には一人も悪人がいなかつたのさ。金三郎も良い男だし、お紋も良い娘だ。番頭の用助も結構過ぎる人間さ。悪いのはあの玄々斎のペテン野郎だ、出鱈目でたらめな人相見の癖くせにサクラなんか使つて、どれだけ諸人が迷惑したことか——」

平次はそう考えていました。

銭形平次の家には、元の平和が戻りました。

煙草の烟けむりと、植木の手入れと、お静の料理と、そして八五郎

死相の女

の頓狂な話と——。

長閑のどかな初夏の風物です。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵——萩 柚月

初出——「錢形平次捕物百話」第七卷 中央公論社 昭和十四年五月二十五日発行

底本——「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 錢形俱楽部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>